いずみさの昔と今 第340回

「泉佐野の縄文時代」

3月から開催の春季企画展「歴史発掘　大阪　2023」と関連し、数回にわたり泉佐野の遺跡について紹介していきます。第1回目は縄文時代を取り上げます。

本企画展では柏原市大県郡条里遺跡から出土した縄文時代の土器や土偶・石棒を展示しています。土偶はその多くが女性を表現した人物像、石棒は男性器を表現したもので、どちらも縄文時代のまつりの道具として代表的なものです。詳細な使用方法や目的はわかりませんが、「子孫繁栄」を願ったものともいわれています。

泉佐野市でも縄文時代の遺跡が確認されていますが、中でも上之郷・長滝地区に存在する三軒屋遺跡が有名です。三軒屋遺跡は昭和46（1971）年に和泉古代文化研究会によって発見され、その後、泉佐野市教育委員会や大阪府教育委員会による発掘調査が重ねられてきました。これまでの調査で、旧石器時代から近世にかけての各時代の遺構・遺物が見つかっています。今回取り上げる縄文時代の遺構・遺物は、樫井川の右岸、JR阪和線と府道30号線に挟まれた東西約150m、南北約300mの範囲において多く見つかっています。

縄文時代草創期（約15，500年前～約11，500年前）にさかのぼる石器もわずかに発見されていますが、出土する遺物の量が多くなり、縄文人が本格的に三軒屋遺跡で生活を営み始めたと考えられるのは、縄文時代後期前葉（約4，300年前）になってからです。大量の縄文土器のほかに、狩猟で使う石の矢じり（石鏃）や、木の実などを加工・調理する叩き石や石の皿、まつりの道具である石棒、土で作られた耳飾りなど、当時の様々な道具が出土しています。なお、出土した石棒には線刻による文様が施されたものがあり、これは泉佐野市の市指定有形文化財となっています。

出土した縄文土器には木の棒や貝殻で様々な文様が描かれていますが、この文様や形からは、その土器が製作・使用された時期が分かります。そこで、どの時期の土器が多いか少ないか、各時期の土器量から集落の盛衰をみてみると、集落の最盛期は縄文時代後期中葉から後葉頃（約4，000～3，300年前）だったと考えられます。ただし、この時期の住居や墓などはまだ見つかっておらず、当時の集落の具体的な様相については、不明な部分が多く残されています。縄文時代晩期前葉（約3，300～3，200年前）には一時的にこの地での活動が低調となるようですが、縄文時代晩期中葉から後葉頃（約3，200～2，500年前）には再び集落が営まれ、竪穴住居や土器を棺としたお墓（土器棺墓）なども発見されています。

以上のように三軒屋遺跡では、若干の空白期間をはさみながらも、およそ2，000年間という長い期間にわたる縄文時代の遺構・遺物が見つかっています。このような長期間にわたる縄文人の営みが確認できる遺跡は、泉南地域では片手で数える程度しかありません。三軒屋遺跡は、泉南地域における中心的な縄文集落のひとつとして重要な遺跡といってよいでしょう。

▶三軒家遺跡出土 石棒【現存19.7㎝】（新修泉佐野市史より転載）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・葛城修験文化を巡る⑧

～重要文化財奥家住宅 森御殿～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に追加認定された「葛城修験 ― 里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

▲森御殿があった奥家住宅の庭

奥家は近世から明治まで樫井の庄屋を勤めました。奥家に伝わる史料に聖護院関係のものがあります。聖護院は本山派修験道の本寺で、毎年3月半ば頃に、紀州友ヶ島修行や中津川修行の途中に奥家へ立ち寄り、宿泊していたことが分かっています。そして滞在時には樫井集落のよもぎを使った草餅の献上品を贈りました。その休息所が奥家の庭にあった八畳敷の草葺き屋根の「森御殿」です。

森御殿は、座敷棟東側に広がる庭園の中にあり、現在は菊の御紋が入った石灯籠、狛犬、石段、庭の築山に礎石が残っています。また高塀には聖護院葛城入峯に際しての出入りの門があるので、この塀は御殿に関連して建築されたことが分かっています。なお奥家が聖護院門跡を迎えたことを示す史料からうかがえる年代は、文化3（1806）年がもっとも古いものとなっています。

【訂正】広報いずみさの2月号19ページ「日本遺産・葛城修験文化を巡る⑦」本文の7行目に誤りがありましたので訂正します。
（誤）手間に　→　（正）手前に
問合先　文化財保護課（☎447-6766）